

家庭言語環境と子どもの二言語能力の関係について —中国につながりを持つ子どもの語彙力と読書力に注目する研究—

姜 芳雨 (お茶の水女子大学大学院大学院生)

1. 本研究の目的

本研究は中国につながりを持つ子ども(以下、日中バイリンガル児童)の教科学習言語能力の一部である「語彙力」、「読書力」について、より効果的な支援を検討するために、「家庭内の言語使用」と「子どもの二言語における語彙力と読書力」の関係性を明らかにすることを目的とする。

2. 研究背景と先行研究

日中バイリンガル児童は日本で益々増加し、日本語を使用して生活し、勉強している子どもが多いと考えられるが、彼らの成長の中に、母語も不可欠で重要な役割を果たしている(中島、2010)。しかし、バイリンガル児童の「二言語能力」と、母語を育む「家庭言語環境」(家庭内の言語使用、滞日年数など)を総合的に見る研究はいまだ少ない(穆、2008; ブッシンゲル・田中、2010; 真嶋、2019など)。これらの研究から、家庭内での母語のリテラシー活動は子どもの母語だけではなく、第二言語の会話力にもプラスの影響がある; 親子間での言語使用は子どもの二言語の語彙力に大きく影響を与える; 子どもの二言語能力を育む最も大きな要因は家庭環境である、などの示唆が得られた。さらに、教科学習言語に触れ始めた小学校低学年(1~3年生)の子どもがその後の高次の学習に進むためには、言語力の基礎を固めることが大切だと考えられるが、日中バイリンガル児童の教科学習言語能力に関わる語彙力、読書力に関する調査はまだ乏しい。真嶋(2019)は子どもの日本語の会話力、読書力、中国語の読書力と家庭環境について調査したが、社会経済地位が低い家庭環境のみに注目した。

3. 研究方法

以上の背景や主な先行研究を踏まえ、本研究は家庭経済状況、居住地域などを限定しない形で、小学校低学年の日中バイリンガル児童を対象に調査を行った。日中バイリンガル児童は幼稚園年長~3年生、滞日年数は2~8年、居住地域は東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県、茨城県、計26名である。また、家庭言語環境を調査するために、対象となる日中バイリンガル児童の保護者に質問紙調査を実施した。彼らの二言語能力をより客観的に評価するために、二言語の母語話者(以下、「日本語母語話者」を「Jmono」、「中国語母語話者」を「Cmono」とそれぞれ比較するが、対象者となるCmonoの年齢層は幼稚園年長~3年生、中国上海市に在住、計15名である。Jmonoについては、櫻井(2018)の巻末資料の一部(1~3年のJmono、44名の読書力の点数)を利用して比較した。

3.1 二言語の語彙力の調査方法

Cmonoと日中バイリンガル児童の中国語の語彙力は「会話テストOBC」(カナダ日本語教育振興会、2000)で測定した。「会話テストOBC」はバイリンガル環境で育つ6歳から15歳ぐらいまでの子どもの会話力を評価するテストである。本研究は子どもの中国語の語彙力を知ることが目的の1つであるため、テスト全体ではなく、39枚の語彙カードを取り出し(以下、「OBCテスト-語彙」)、子どもの中国語の日常語彙知識をテストした。

また、日中バイリンガル児童の日本語の語彙力は「PVT-R 絵画語い発達検査」(上野・名越・小貫、2008；以下、「PVT-R」)を用いて調査した。「PVT-R」は子どもの日本語の語彙力が何歳の子どものレベルに当てはまるか(語彙年齢)を測定できる検査である。この検査は大量な Jmono のデータによって、標準化されたテストになっているため、本研究は実際の Jmono の語彙力については改めて調査せず、検査の基準に従い子どもの日本語の語彙力を評価することにした。

3.2 二言語の読書力の調査方法

Cmono と日中バイリンガル児童の中国語の読書力は「B-DRA-C 中国語版読書力評価ツール」の開発経緯を報告したウリガ・櫻井(2012)を参考に評価した。「B-DRA-C」は「読書習慣・傾向」、「音読行動」、「読解力」という3つの評価要素、計12評価項目から子どもの中国語の読書力を評価している。

日中バイリンガル児童の日本語の読書力は「外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント DLA」(文部科学省、2014；以下、「DLA」)で測定した。本研究は「DLA」の「読む」の評価方法のみを使用し、子どもの読書力を評価した。「DLA-読む」は「読解力」、「読書行動」、「音読行動」、「語彙・漢字」、「読書習慣・興味態度」という5つの評価要素、計12評価項目から子どもの日本語の読書力を評価している。

3.3 家庭言語環境

日中バイリンガル児童の家庭言語環境について、本研究は質問紙調査を行い、「対象者の背景」(「日本での長期滞在年数」、「長期滞在し始めた年齢」)、「家庭の社会経済状態」(「母親の学歴」のみ)、「家庭内の使用言語(言語別での会話の割合)」、「家庭内のリテラシー活動」という4つの要素から家庭内の言語使用を把握した。

4. 結果と考察

4.1 二言語の語彙力と読書力

日中バイリンガル児童の中で、学年相当の語彙力を持っているのは中国語では14名、日本語では12名である。ただし、日本語における語彙テストの難易度は中国語より高いため(日本語：日常生活語彙と教科学習語彙、中国語：日常生活語彙のみ)、日中バイリンガル児童の語彙力は日本語の方が中国語より優れていると推測できる。

次に読書力については、学年相当の中国語の読書力を持っている子どもは3名のみである。また、櫻井(2018)の結果と比較してみると学年相当の日本語の読解力を有しているだろうと推測できる対象児童が18名いたが、この点についてはさらなる調査が必要である。さらに、読解力を含め、日中バイリンガル児童の日本語の読書力は全体的に中国語の読書力より優れていることが分かった。

4.2 二言語能力と家庭内の言語使用

結果ついて正の有意な相関関係が見られたのは「母親の学歴」と子どもの「中国語の読書力」の間、「長期滞在年数」と「日本語の語彙力」の間、「長期滞在年数」と「日本語の読書力」の間である。負の有意な相関関係が見られたのは「長期滞在し始めた年齢」と「日本語の読書力」の間である。しかし、二言語能力と「家庭内の使用言語」、「家庭内の言語活動」の間に有意な相関関係は見られなかった。その結果はブッシンゲル・田中(2010)とは異なる。

【主な引用文献】

櫻井千穂(2018)『外国にルーツをもつ子どものバイリンガル読書力』大阪大学出版会